

方正県日本語学校の創立について

方正県日本語学校名誉校長 王 鳳山

方正県日本語学校は1993年4月1日にオープンしたが、設立が決まったのは1992年10月である。当時、県委員会書記・鄭鴻徳を団長とする代表団が日本訪問中、日本の方正地区支援交流の会会長・石井貫一先生、専務・牧野史敬先生の提案でハルピン市教育委員会に申請して認可を得たのがこの学校である。

■ 時代の背景

1945年8月15日、戦争が終わった後、日本国によって方正地区及び周辺地域に遺棄された開拓団員1万人余が方正県に集まった。彼らは老人、女性、子供ばかりだ。冬なのに食べるものも着るものもない。飢えや病気で死んだものを除いて5000人以上の女性と子どもたちだ。1946年3月、方正県人民政府ができ、政府は付近の住民に呼びかけて人道主義の精神を発揮、飢えと寒さに死線をさまよう日本の残留婦人と子どもたちを収容して彼らの命を救った。

当時、日本の14年に及ぶ統治から解放されたばかりの方正人民は、まだ生活も苦しかったが、徳をもって恨みに報いるため、この5000人余の残留婦人と子どもたちを家に連れて帰り、医療、料理、世話など家族同様に接することで彼らは健康を回復し、それぞれの家庭に溶け込んでいった。年月が過ぎて、ある者は学校へ行き、ある者は仕事に就き、またある者はここで結婚し、彼らの暮らしは安定し、幸せで、満ち足りた生活をするようになった。

時は流れ、1972年、中日国交回復が始まると、多くの孤児は一世も二世も日本へ帰国を申請し、第3代もそれにつれて日本へ渡って行った。彼らと方正の人民は深い感情で結ばれ、帰国後もある人たちは方正の若者と結婚、方正の若者もまた、日本へ帰った若者と連絡しあい、友達になり、婚約し、結婚した。こうなると生活の上で新しい問題が出てきた。言葉が通じないという矛盾である。方正地区支援交流の会・会長の石井貫一先生、専務の牧野史敬先生は、この状況を見て提案した。方正県と日本の国民交流が頻繁になり、日本に移住した方正県民や孤児2世、3世の帰国が多くなるとともに言葉の障害も大きくなってきた。日本語学校を作って彼らの日本語学習に役立てられないか。日本語の基礎ができれば彼らが日本へ行っても言葉の障害がなく、早く日本の社会に溶け込めるし、方正人民と日本人民の友好、経済文化の交流にも益するところがある。方正県政府はこの地の実情を考慮し、この提案を受け入れた。そして日本語学校—方正県日本語学校、その性格は社会のパワーを高めるための学校経営（民営）に同意したのだった。

■ 学校の経営状況

方正県日本語学校は県政府の指示に従って、資金を自前で用意し、2教室を借り、管理経験のある校長1名、資格を持つ日本語教師2名、職員2名を揃え、多くの生徒が待つ中、

1993年4月1日、開校した。第1期学生100名余。開校にあたっては日本の「方正地区支援交流の会」専務理事・牧野史敬先生、豊田利郎先生、大類善啓先生、京葉僑連の董殿義会長、徐誠副会長などの友人がお祝いに駆けつけてくれた。

1995年春、方正地区支援交流の会は〔NGO〕の名義で、日本国瀋陽領事館の大和総領事、畔津領事に方正を訪問してもらい、当校に学習用ラジカセ1台とテーブル20本を寄贈していただいた。

18年来、方正県日本語学校は各方面の大きな支持をいただいて、つつましい経営、質の高い授業、厳格な管理、周到なサービス、学生たちの高い学習熱態度を維持し、ますます優れた学校になってきた。当学校は安い学費で、一部経済的に困難な学生には授業料を免除するなど、さまざまなやり方によって、5500名余の生徒を養成した。彼らの多くは日本へ行って永住し、留学した。また多くの職場の職員は日本語を勉強し、資格をとった。またさらに、ここで日本語を勉強した後、大連や青島など沿海都市の日本企業や合弁企業に就職した者もいる。

方正県日本語学校は創立以来、何度も省、市、県から先進的な職場という評価を受けている。

■ 友好と交流の懸け橋

方正県日本語学校ができてから、多くの残留孤児2、3世が日本へ帰国する前に日本語を学んだだけではなく、さらに多くの周辺地区の若者が日本へ留学や仕事、結婚のために行く時にここへきて日本語を勉強した。建学以来、東京、埼玉、大阪、名古屋、山形、長野、福岡、広島などから多くの団体が訪問した。日本の数十の学校からこの学校へ留学生募集にこられたし、何人かの学者も見学に訪れた。こうした活動は中日両国人民の文化交流を促進し、両国人民の友情を増進している。

方正県日本語学校は中日国交回復後に民間によって発案されて開校したものである。開校と経営の経過の中で、国内および日本の民間団体の多くの支持をいただいた。困難を克服し、出費を抑えることによって次第に大きくなり、今ようやく、まずまずの規模になった。しかし正規の学校としてみれば、その規模はまだまだである。中国の平和発展、中日両国人民の友情が日増しに高まっている新しい時代に、発展の必要から見た場合、まだまだ不十分である。しかし私たちはこの成果をさらに大事にし、学校のさまざまな条件をたえずより向上させ、将来、一定の規模をそなえ、実績、資格ともに備えた正規の学校として、この学校を方正地区の人民と日本人民との経済文化交流の絆、懸け橋として、両国人民の世代代々の友好のために貢献したいと考えている。

附記：方正県日本語学校の創設及び経営期間において献金を頂いた日本の友人及び団体を記す。

石井貫一、豊田利郎、森山誠之、牧野史敬、鈴木俊作、大山進、林幹男、大類善啓、奥村正雄、山川伊一郎、堀越善作、董殿義、徐誠、李国啓、山形県大石田町、石井貫一夫人、木村直美女史ら各先生方。 (奥村正雄記)